

集団課題において社会的な手抜きが生起する状況の検討

— 相互独立的自己観及び協調的自己観に着目して —

○門田 咲南

(安田女子大学心理学部現代心理学科)

大学教育においてグループ学習が重要とされている一方で、フリーライダーの問題が指摘されている。集団で仕事をする時の方が1人でする時よりも1人当たりのパフォーマンスが低下する現象の「社会的な手抜き」の問題である(蒲生ら, 2019)。その要因の1つとして、相互独立的自己観と相互協調的自己観が挙げられており、阿形・釘原(2008)によると、前者は、自己の個人的属性を高めることを重要視し、後者は当該の対人関係の規範や価値観に自らが適合するかを重要視するという明確な違いがあり、それによって作業状況の捉え方に違いが生じ、「社会的な手抜き」の生起有無に影響を及ぼすとした。

本研究では、両自己観の認識の違いに着目し、集団である課題に取り組む際に「社会的な手抜き」が生じる作業状況について新たな検討を行った。

研究Ⅰでは本研究における調査対象者がどのような自己観を有している人々で構成されているかを調査した。研究Ⅱでは自己観の程度により集団課題場面における「他作業員からの声かけ」の違いによって作業量に差が生じるかを実験的に検討した。なお、声かけについては「社会的な手抜き」を誘発するであろうと予測される「ネガティブな声かけ」と、声かけを行わない「統制群」の2水準に設定した。

研究Ⅰ方法 調査対象者：18~23歳の女子大学生153名(平均年齢=20.2歳, $SD=1.26$)であった。質問項目：高田ら(1996)による相互独立的-相互協調的自己観尺度(改訂版)を用いて20項目7件法で回答を求めた。

研究Ⅰ結果と考察

調査対象者の相互独立・協調性の平均値は、相互独立性=4.40(0.81)、相互協調性=5.47(0.73)であり、高田(1999)の調査結果と比較したところ、本研究の調査対象者層は相互協調性の高い群であることが判明した。また確認的因子分析の結果より、因子負荷量の低かった2項目を研究Ⅱの分析では除外することとした。

研究Ⅱ方法 実験対象者：研究Ⅰの調査対象者の内、女子大学生33名(平均年齢=21.2歳、

$SD=1.28$)であった。実験時期：2022年8月~11月
実験概要：実験補助者1名と実験を行った。実験は、作業開始直前に補助者からネガティブな声かけをされる群と声かけをされない統制群に分けた。実験内容は15分間、折り紙をするというものであった。実験後に質問紙の回答を求めた。質問項目：小窪(1996)を参考にして作成した課題や実験事態の評価を測る8項目4件法と対人魅力尺度(林, 1978)及び阿形・釘原(2008)を参考にして実験補助者の印象を測る13項目7件法で回答を求めた。

研究Ⅱ 結果と考察

各条件下における作業量の標準得点と相互独立的-相互協調的自己観尺度(改訂版)について、ピアソンの積率相関係数を求めたところ、有意な相関は見られなかった。

しかし、各条件下において相互独立性・相互協調性と自他の作業量への評価懸念について同様の分析を行ったところ、ネガティブな声かけ条件下においてのみ、自他の作業量への懸念は、相互独立性との間に有意な負の相関が、相互協調性との間に有意な正の相関が見られた(表1を参照)。

表1 各条件下における相互独立性・相互協調性と作業量の懸念に関する相関分析

	ネガティブな声かけ群		声かけなし統制群	
	相互独立性	相互協調性	相互独立性	相互協調性
自分の作業量への懸念	-.657**	.741**	.263	.342
他作業員の作業量への懸念	-.595**	.735**	-.031	.422

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

これらの結果より、本研究において相互独立的自己観および相互協調的自己観と社会的な手抜き生起に直接的な関連は見られなかったものの、相互独立性と相互協調性の中で「ネガティブな声かけ」という作業状況の認識に違いがある可能性が示唆された。今後の課題として、作業量の識別・評価可能性の提示方法や実験課題内容、そして個人内差に考慮するためのベースラインの設定といった実験方法の改善を行った上で、再度「他作業員からの声かけ」により社会的な手抜きが生起するかを実験的に検証する必要があると考える。

(指導教員：山本 文枝)